



志津川の海をダイビングで魅了!

佐藤長明さん



「温暖化に伴い海の生物も変化している。その『変化』を逃さないことがこれから大切になっていく。そのためにも記録としての撮影も大事になる」と話す佐藤さん。

NAGAAKI SATO

この夏、海とともに生きる南三陸にとってこの上ない観光コンテンツが復活した。2019年7月、志津川にオープンしたダイビングショップ「GruntSculpin南三陸店」。

オーナーの佐藤長明さんは、23歳の時、旅行で訪れたパラオでダイビングに魅了された。その後各地で潜り、ガイドとしての技術を習得すると、小さな時から遊びで潜っていた地元で2005年にダイビングショップを創業。クチバシカジカやダンゴウオを志津川湾で発見し写真に収めると、全国のダイバーから注目を集めた。しかし、経営が軌道に乗ってきた頃に、東日本大震災が襲った。自宅や店舗、全てを失っても「海」への想いは揺るがなかった。「志津川と親戚のような関係」と話す函館・白尻で2012年7月にダイビングショップをオープン。好評を博すなかで、志津川での再開を待ち望む声にも出会った。

多くの宝を奪い去った海。その海で観光してもよいものか、と悩まされたこともあるという。しかし、「いつまでも『復興』とは言っていない。観光地として外の人に来てもらう。そのために、ぼくができるのは、潜って海の魅力を見つけ、美しい写真を撮り、ガイドをすること。それが地域の魅力を高め、地域の食の印象も高めていく」佐藤さんは力強く話した。

みんなのおふくろ! 「さとみのお母ちゃん」健在です。

佐々木さとみさん

**保** 呂羽の山に陽が沈む夕暮れ。八幡川中橋のたもとの真っ赤な提灯が、宵時(酔い時)を知らせる。

「居酒屋・さとみ」始まりは昭和50年代。地元の仲間はもちろん、単身赴任の医師・教師・警察官・公務員などからも愛され、毎晩賑やかだった。ご主人の故・孝志さんと二人三脚でのお店は、まるで家族のような雰囲気包まれ、さとみさんは看板娘ならぬ「おれ達のお母ちゃん」になっていた。

頑張っている人々を応援したいという気持ちから、綱引き団体・コマンドの実質オーナーとなり、大晦日には年越しそばを提供したり、歓送迎会では一緒に泣き笑いしたりした。

孝志さんが病に倒れた後も店を続け続けたが、震災で状況は一変。「多くの常連さんが支えてくれた。今でもその人々と交流があるのがうれしくてね。入谷に移った『居酒屋・和来』にも顔を出してくれるんだ」

10代で志津川八幡町の海産物会社に勤務し、経理や営業にと奮闘した。当時はまだ、自動車を運転するのは珍しい時代で「女性の免許取得は旧志津川町では初めてだったよ」と胸を張る。

「そろそろ免許を返納しようかなと思っている。移動手段が無くなるのは困るけど。一瞬不安気になるも、すぐ「まあ、何とかなっぺ」と笑い飛ばす。正に豪放磊落、みんなのお母ちゃんは健在だ。

SATOMI SASAKI



歌津出身。「南三陸町民の暮らしぶりが、全国の手本となれば良いし、私も役に立ちたいよ」と語り、3人の孫たちや姪の歌手・まきのめぐみさんの話題になると、さらに笑顔がはじける。